

自由南アフリカの声

Voice of Free South Africa

2011年10月

No. 57



～1冊の本が人生を変える～

発行 / アジア・アフリカと共に歩む会

Together with Africa and Asia Association(TAAA)

2011年10月までの報告と予定

- 5月～8月 サッカーボール750個を南アへ送付準備
- 5月～8月 被災地石巻等を訪問・物資送付
- 5月～10月 南ア・ウグ郡にて移動図書館・学校菜園活動など実施
- 6月～9月 インターナショナルスクールなどから英語の本引取り
- 8月 日本より南アの活動地を訪問
- 9月 南アへ本12798冊、サッカーボール751個、算数セット52個などを送付
- 9月 JICAよりモニタリングチームがTAAA活動地へ訪問
- 10月10日 TAAA活動報告会(東京にて)
- 10月下旬 本など段ボール348個が南アに到着予定
- 11月12～13日 アフリカンフェスタに出展(横浜赤レンガ倉庫)
- 1月 TAAA活動報告会(さいたま市にて)

目次	南アフリカ共和国におけるTAAA活動報告(平林薫)	2
	南ア訪問記 1～4(久我祐子・津山直子・浅見克則・森直之)	4
	「被災者/被災地の記憶」に出会い、巻きこまれていく(茂住衛)	10
	主な活動・ルイボスティ	11
	寄付・会費・本などを下さった方々	12



インプレロ小にて、ボールを渡したとたんに初めての女子サッカーが始まった

南アフリカ共和国における TAA 活動報告

TAA 南アフリカ事務所代表

平林 薫

<JICA 学校を拠点とした地域農業促進プロジェクト>

TAA 南アフリカ事務所は6月1日より、拠点をダーバンから南へ約1時間のヒバディーンという小さい町に移した。この地域は以前からサーフィンを通してしばしば訪問しており、周辺の学校への本や物資の寄贈なども行っていたが、直接のきっかけとなったのは昨年7月から開始となったJICA 草の根協力事業“学校を拠点とした地域農業促進プロジェクト”である。ヒバディーンは事業の対象3地域のひとつで、プロジェクト対象校やコミュニティーに近くなったことでつながりも深まり、活動が充実してきている。



クワズルーナタール州には10の郡があるが、ウグ郡という一つの郡だけでもかなりの広さがあり、活動を行っている3地域プンガシェ(写真右)・ドウドウドウ・ヒバディーンは気候や土地などの環境に違いがあるため、人々の生活習慣などにもそれぞれ多少の違いが見られる。プンガシェ・ドウドウドウは山の中に民家が点在しており、雨量も沿岸部より少なく、牛の放牧が生活の中心といった環境のため、作物の栽培はあまり行われてこなかった。比較的雨が多く温暖なヒバディーンは、州内の他の地域に比べて“農業”が人々の生活に身近なように感じられる。ヒバディーン地域では“活動に参加したい”という問い合わせが新しい学校から入り、事業開始時から6校増えて13校となった。3地域では小学校26校、高校4校の計30校が事業に参加している。

畑作りの活動を行っている、“水のありがたさ”をしみじみと感じる。対象校や周辺の家庭にはほとんど水道は通っておらず、コミュニティーの共同水道、もしくは雨水と川の水に頼っている。近くに川のない地域は特に乾季の冬にはとても厳しい状況になる。自治体は給水車を走らせているが、あくまでも飲料水であり、“畑に使うなどとてもない”と言われてしまう。水の供給に関しては私たちでは解決できない部分もあるが、雨水を確実に溜めることや、生徒がペットボトルで少しずつ持ち寄るなどして活動を行っている。3地域の中でドウドウドウは一番乾燥した地域で、周辺に川もない。最近になってやっと水道管設置工事が始まったので、早急に完成することを願っている。

研修会は、対象校のプロジェクト担当教師を対象として1学期に一回、それぞれの地域の中心に位置する学校を会場にして開催している。第2学期は6月上旬に、第3学期は8月下旬に開催した。6月の研修会では、まず各校が活動の進捗状況を発表し、10点満点で自ら採点した。また、農薬を使わない害虫駆除(もしくは回避)方法や、畑と栄養に関してクイズ形式で指導した。会場となった学校の畑をモデルにして、良い点や改善点などを話し合った。8月の研修会では、各校の菜園の写真を張り出して発表し合い、改めて自己採点をした後、“良い畑作りに必要なこと”をグループごとに話し合い、リストを作成した。また、畑での実地として植樹の仕方を指導した。

研修会で特に強調しているのは、“栄養のある食べ物をとる”ことの重要性に常に意識を持つということである。活動では“畑作り”の知識や技術だけでなく、栄養についての講義も行い、自分たちの畑で採れる野菜がスーパーで購入するより新鮮で栄養価が高いことを認識し、調理法や味付けにも工夫してできるだけ体に良い食事をとることが大切であると指導している。また、対象地域の人々は GMO(遺伝子組み換え作物)に関する情報を入手しておらず、8月の研修会で講義を行った際、ほとんどの教師が“何のことが全くわからない”状態であった。スーパーなどで販売されている一般的な粉トウモロコシは、ほとんどが遺伝子組み換えされているものであり、選択の余地は少ないといえるが、食糧生産の過程で何が起きているのかを地域の人々も知る権利がある。



9月第1週は植樹週間ということで、プロジェクトでも学校の畑や環境の向上、果物の収穫を目的として、各校にオレンジ・ミカン・バナナの木を2本ずつ配布、生徒と共に植樹を行った。現在、“菜園作りと栄養”をテーマとした詩や絵のコンペティションを行っており、優秀

校、生徒には、果樹や本、文房具などの賞品が授与される。また、高校では菜園活動に従事している生徒を中心に“ガーデニングクラブ”が設立準備を行っている。6月より新しくプロジェクトに参加したシトコジレ高校は、担当のゴンベセ教師の指導の下ですでにクラブが設立され、活発に活動が行われている。メンバーのうち15名が9月16日に農業専門家リチャード・ヘイグ氏の農場を訪問して研修を受けた。生徒たちは、有機農法による野菜作りはもちろん、土地固有の牛や羊の飼育や花の栽培、遺伝子組み換えでないトウモロコシや伝統野菜の栽培、手作りのパンやフルーツジュース作りなど、様々な指導を受けた。菜園活動にはもちろんすべての生徒が興味と能力を持っているわけではなく、特に高校生になるとそれがはっきりと表れる。やる気のある生徒が継続して活動を行い、経験を積んでいけば、近い将来職業として農業に従事する可能性も出てくる。それが農業の地域への広がりにつながり、雇用を生み出すことにもなると考える。

8月第1週には、TAAAメンバーの視察訪問、9月第3週にはJICAより担当者のモニタリング訪問があった。事業開始から1年強の時点で進捗についての意見やアドバイスをいただいたことは、今後の活動の方向性を確認し、進めていく上で大きな力となった。

<図書プロジェクト>

4月より、ひろしま祈りの石国際教育交流財団からの支援により、ウグ郡の20校で図書プロジェクトが開始となった。第1期(4月から6月)は対象校の決定、各校の校長や担当教師への活動のブリーフィング、学校図書室の有無や状態の把握、各校の教師名をシステムに入力、貸出し用図書の準備などを行った。対象校は小学校16校、高校4校で、20校のうち、図書室としてのスペースだけでもある学校は6校で、スペースが全くないか、あっても倉庫のような状態である。小学校2校では自助努力で本棚を設置したが、蔵書は圧倒的に少ない。それでも本はきちんと整理され、図書活動が始まっている。



ムチエレニ小にて、「忘れられないあの日」(広島原爆の本)

このような学校の状況下では移動図書館車の巡回は各校に大変喜ばれている。第2期(7月から9月)の冬休み終了後から巡回訪問を開始し、最初の巡回では生徒たちに図書館の使い方や本の扱い方についてブリーフィングをした。学校によってはまだ生徒が自分で本を選ぶことや管理が難しいということで、教師が借りてクラス内で利用する場合もあった。基本的に一学期に2回、貸出しと返却で訪問するのだが、利用の仕方は学校の希望に合わせ、例えば1回目の訪問では6年生全員が借り、2回目の訪問で返却すると同時に5年生全員が借りる、という方法を取り入れている学校もある。

生徒たちは図書館車の本棚から読みたい本を選ぶのだが、慣れないことと、あれもこれも手にとってみたいと興奮していることから、低学年の生徒が難しい本を取ったり、高学年の生徒が絵本を取ったり、他の生徒が選んだ本を欲しがったりとバスの周りは大騒ぎだ。でも、生徒たちのうれしそうな顔を見ると、また訪問してもっとたくさんの本に触れさせてあげたいと思う。

4月まで図書活動を行っていたンドウェドウェ地域のシャラガシエ小のドューベ先生から、9月9日に学校で開催される読書イベントへの招待状が届いた。その日はドウドウの学校訪問の予定が入っていたため残念ながら出席できなかったが、コンテナ図書室が設置されて以来、生徒たちが本にアクセスできるようになり、図書活動が活発に行われている。読書イベントの開催へのお祝いのメッセージを送った。今年度の本が日本から到着したら、ぜひ届けに行きたいと思っている。



<サッカープロジェクト>

THAN 球プロジェクトから支援をいただいたサッカーボールは、イジンゴロウェニ教育センターで各校に配布された後、学校訪問の際にも直接届けて大変喜ばれている。私たちが訪問している学校では生徒たちにとって唯一のスポーツといえるサッカーであるが、ボールなどの必需品は圧倒的に不足している。また、タウンシップ(黒人居住区)の学校は近くにコミュニティのクラブがあるが、遠隔地では学校対抗のトーナメント以外に本格的にプレーをする機会もほとんどない。生徒の才能を伸ばしてあげられるような機会をもっと作れたらと願っている。

インブレロ小の女子生徒。初めてのサッカーに夢中です。

久我 祐子

ンドウェドウェからウグへ

TAAA は、2010 年 7 月からウグ郡の三つの地域ヒバディーン、ドウドウドウ、ブンガシエにおいて学校を拠点とする菜園プロジェクトを行なっている。これは、2007 年~2009 年にンドウェドウェという別の地域で行なってきた小学校対象の学校菜園プロジェクトを応用し発展させる試みである。ンドウェドウェでは 25 校を対象に菜園活動をしてきたが、保護者を中心に周辺住民が学校菜園に積極的に協力してきた。そのうちに「私達も菜園をやりたい」という声があがり、周辺地域にも、少したが菜園が広がった。この自然発生的な地域への菜園の広がり、プロジェクトの当初の目的にはなかった発展で、改めて、コミュニティーにおける学校の影響力の大きさを感じた。ウグでのプロジェクトでは、ンドウェドウェの経験に基づき、学校菜園を中心にしながらも、より意識的にコミュニティーを巻き込むことを目的としている。

しかし、ウグ郡でプロジェクトを始めて 1 年たち、コミュニティーへゆっくりとでも確実に広げていくには、外部からの積極的な働きかけで菜園グループを作り指導していくことよりも、「私達も菜園をやりたい」と自発的にできたグループとパートナーを組み、彼らの自主性を尊重しながら支えていくことの大切さを学んでいる。



ヒバディーンのコミュニティ菜園にて

ムタルメ小学校の保護者菜園グループ

活動地域の一つであるヒバディーンのムタルメ小学校に到着すると、保護者の菜園グループの女性達 8、9 人が私達を待っていた。保護者のなかから「私達も自分達の畑がやりたい」と自発的にできた菜園グループで、校内の一部と学校の周辺に土地を耕し菜園をしている。

南アの地方の児童の多くは祖母に育てられている。ムタルメ小学校の菜園グループも「おばあちゃんグループ」で、孫たちはムタルメ小学校の生徒たちだ。

農業専門家のリチャード・ヘイグさんとこの学校で落ち合う。リチャードさんは、長年、農業指導者として、他の NGO でパーマカルチャーに基づく農業を指導してきた方だ。TAAA の菜園プロジェクトでは、学校教師やコミュニティーグループを対象に定期的にワークショップを行い、菜園技術を教えるだけでなく、栄養、遺伝子組み換え作物についてなど農業や食に関する様々なテーマで講義をしてくれている。

保護者グループは、校内裏手の一部をメイズ畑にしようと、急斜面の藪の中に入り懸命に草木を刈っていた。「どうしてこの場所をメイズ畑に選んだのですか」「牛に食べられないためです」牛を放牧しているこの地域では、畑が牛の餌になってしまう危険性がある。「水はどうするのですか。」リチャードとグループの女性達とのやり取りが続く。

Project or Development

写真右：ムタルメ小の給食。好きなところで食べます

「ここはメイズを育てるのには、あまり良い場所ではない。育つことは育つけれど」とリチャード氏は私に言う。「なぜ彼女たちに言わないのか」と尋ねると「私は頭から指示はしない。彼女たちに考えてもらいたい。農業は試行錯誤が大切だ」「それでも、まだ土地を耕す前なのだから、彼女たちが大変な思いをする前に、より適切な場所を教えてあげれば良いではないか」という不満の気持ちが顔に出ただろう私に、リチャードは尋ねた。「祐子、どちらが大切か。Project or Development?」菜園プロジェクトは、プロジェクト終了時に一定の成果を上げることも大切だが、その後、いかに菜園が根付き継続するかの方が重要だ。主体性、自主性、モチベーションが鍵となる。リチャード氏の「Project or Development」の問いかけは、視察訪問中、私の耳から離れなかった。



写真左：筆者も南アの土を耕してみる

菜園グループは、学校の周辺にも畑をもち、そこでは豆、チリ、ほうれん草、赤カブ、スイートポテトなどを育てていた。よく働き、よく笑う彼女たちから、菜園に対する意気込みや愛が伝わってくる。彼女たちの菜園がずっと根付き、発展していき、いずれは地域の若い人達も巻き込んでいってほしい。

学校菜園の役割

しっかり定着した菜園は、学校に多くの恵みをもたらす。学校菜園から、給食の食材が生まれる。余剰作物を地域住民に売ること、わずかだが学校や菜園への資金となる。また、今回訪問した7校のほとんどが、貧窮家庭の生徒に作物を持ち帰らせていることが分かった。学校を拠点として、少しずつだが、地域の食生活に野菜が普及している。

しかし、学校菜園の役割は、収穫物の提供だけではない。子どもたちは菜園の世話をすることで多くを学ぶ。また、菜園を日々の授業に取り入れ「教育の場」とすることに、学校で菜園活動をする意義がある。今回の視察で訪れた学校の多くは、自然科学、生活科、絵画、栄養の基礎知識など、日々の授業に菜園をうまく活用しているか、少なくとも、試みていることが分かった。基本的な教材や設備が整っていない貧しい学校では、菜園は様々な教材になる。教師たちの応用力が試される。

ムタルメ小学校の菜園担当者、クマロ先生は、菜園を教育にフル活用しようとしている教師のうちの一人だ。菜園では、自然科学はもちろんのこと、基本的な経済活動も教えているという。生徒達に「Food Production」という題で、菜園の絵をスケッチさせたというので、教室に入って見せてもらった。忠実に写生した絵、想像力たくましい絵、野菜の特徴のとらえ方や色づかいかも様々で、見ていて楽しい。菜園から採ったという葉っぱの押し花もあった。

南アフリカの遠隔地域は、他のアフリカ諸国一般に見られる自給自足的な農村になっていない。黒人の自立を妨げるアパルトヘイト政策がとられてきたこの国固有の歴史は、白人による大規模農業を進展させ、黒人地域の農村の発展を抑えてきた。私達が訪れたウグ郡の地域も、人影のないサトウキビ畑が広がっているが、民家周辺には畑はほとんどみられなかった。「自分達が食べるものを育てる」という、他のアフリカ諸国の地方でごく一般的に行われていることを、南アフリカのウグ郡の小学生たちは、学校菜園を通して、貴重な経験として学んでいく。

ムタルメ小学校では、クマロ先生の熱心な取り組みのお陰で、最近菜園クラブができたという。しなやかな吸収力をもつ小学生たちには、菜園とのふれあいのなかで、色々なことを感じ取り、学んでいってほしい。今彼らが学校菜園から吸収しているあれこれが、将来この地域で菜園が広がっていく上での礎となっていくことを願う。

南ア訪問記 2 (2011年7月31日~8月9日)

ウグ郡での学校菜園の取り組み

津山 直子

南半球に位置する南アフリカでは、8月は冬終盤にあたる。今年は例年になく寒さで、雪による道路の閉鎖も各所で起きていた。冬でも比較的温暖なインド洋側のクワズルー・ナタール州でも、寒さと悪天候が続いていたが、滞在中は好天に恵まれた。ひどい雨が降るとたどり着けない学校もあるので、順調に日程を過ごせてほっとした。



ムチレニ小の学校菜園

ダーバンから海岸沿いの高速道路で1時間半ほど南下すると、ヒバディーンに到着する。美しい海岸線の土地は、アパルトヘイト下では白人地域として開発され、豪邸が建ち並ぶ地区やショッピングモールもある。そこから、内陸に入ると、小さな山が連なる山間部になる。ひと山全体がさとうきび畑という風景が続くのは、20世紀前半から作られた白人農場地域で、それを過ぎるとズルー人の村落がある。

斜面に張り付くように建つ家々を見上げる。どうやってたどり着くのかと思う天空の集落もある。主食のトウモロコシの収穫期は終わって

写真右：エナレニ農場の伝統牛のンゲニ



いるが、刈り取りの後も見られないので、村でお母さんたちに聞いてみると、「作ってないよ」とあっさり言われてしまった。他の州でも農業が衰退している村は多いが、主食のトウモロコシは限られた土地でも自給用に栽培していることが多い。自給分をすべて賄えなくても、トウモロコシを栽培することが、日本での米作のように、村人の生活カレンダーの一部になっている。訪問中にいろいろな村で聞いてみたのだが、作っていると答えた人は2割に満たなかった。いつ頃から作らなくなったのだろう。村の高齢の人から農業の変遷を聞いたり、文献から調べてみたいと思いつつながら、車の外に広がる風景に見入っていた。

農業専門家のリチャードさん

ウグ郡に行く前日に、TAAAの農業研修を担っているリチャードさんのエナレニ農場を訪問した。1990年半ばから、環境保全型農業に取り組むNGOのネットワークで共に活動したのだが、久しぶりに再会できてうれしかった。当時彼はバリートラストというNGOで働いていて、農業研修の優れたトレーナーとして、他団体からも頼りにされていた。数年前に念願だった自分の農場を購入し、牛や羊、豚、鶏などの伝統種の飼育と有機野菜の栽培をしている。

今では希少価値となった伝統種は、この地の気候に適していて丈夫で、質が高いと見直されているが、繁殖や育成に時間がかかる。絶滅寸前の伝統種もあり、そういう家畜を何十頭も、子どもを育てるように手をかけて育てている。「ングニ」と呼ばれる牛の伝統種は、一頭一頭の色や模様が違い、個性的で、美しい姿だ。

農場での忙しい日々を調整し、毎月4～5日をTAAAの農業専門家としてウグ郡で活動している。技術的なことだけでなく、彼の農業に対する姿勢や思いが、子どもたちや先生にも伝わっているようだ。

リチャードさんが何度も言っていたのが、「ただで物をあげる援助の弊害」だった。「政府もNGOも『チャリティー(Charity)＝慈善』的支援が多く、人々が可能性を伸ばすことを阻害し、受身的な生きかたを助長する結果になっている。それが、年を追うごとにひどくなっている。学校菜園を支援するNGOや政府の『プロジェクト』もたくさんあるが、道具や種子の供与+研修のセットで終わっていることが多い」という。



写真左：ムチェレニ小にて



写真上：ブンガシェのエシオエニ小。キャベツの収穫

ウグ郡での学校菜園

TAAAは、2010年7月からウグ郡の25校の学校で菜園作りを支援している。TAAAが関わる以前の菜園活動の取り組みや経験は、学校ごとに異なる。リチャードさんがいうように、学校菜園を支援する政府やNGOのプロジェクトはいろいろあるので、これまで支援や研修を受けたことがある学校も多い。特に海岸線に近い地域は、幹線道路からのアクセスもよいためか、支援を受けてきた学校が多く、他方、山深く入っていく地域の学校では、支援がまった

く入っていなかった学校もある。

興味深いのは、支援を受けてきた量や期間と菜園活動の成果は、比例していないことだ。その辺を活動に関わる人たちと一緒に考え、分析することは、TAAAの今後の取り組みにもつながりそうである。

～日本からの南ア訪問の後に～

9月16日、ヒバディーン地域・シトコジレ高校の菜園クラブのメンバー15名と教師2名が、農業専門家ヘイグ氏が経営するエナレニ農場を訪問し、研修を受けた。この地域は公共の交通機関に頼ることができないため、プロジェクトでミニバスを手配した。このプログラムは、学校内の菜園で活動を行っている高校生に野菜作りだけでなく、牧畜などのより広い農業の知識を得る機会を与えることを目的としている。研修で生徒たちは、有機農法での野菜作りはもちろん、伝統牛や羊の飼育、養鶏、花や伝統トウモロコシの栽培、灌漑用水の確保などについて、見学しながら説明を受けた。また、実際にパンやフルーツジュース作りも行なった。プロジェクト担当のンゴベセ教諭は、「生徒たちにとって、学校やコミュニティ内では得ることのできない貴重な体験となった。農業に興味を持ち、実際に活動を行っている生徒たちなので、将来、農業に従事する人材が出てくることを期待している」と話していた。このプログラムは来期も継続して行なう。(平林 薫)



9月にエナレニ農場を見学する高校生



移動図書館車プロジェクト視察記

浅見 克則

8月上旬、久し振りの南ア行。トランジット込で目的地まで彼は24時間の苦行の末、ピーカンのダーバン空港に降り立った。10数年前にはくすんだ空港の片隅に自動小銃の警官が立っていたが今回はどこもきれいに整備されて警官の姿も見えない。高速道路も整備され少なくとも表面的には10年前よりずっと進んだ印象を受けた。

数年に亘る「ンドウェドウェ」における図書整備活動・移動図書館活動に一定の成果が見られたとの判断からより状況の厳しい「ウグ郡」への転出を計る事になった。今回、「ンドウェドウェ」、「ウグ郡」の一部を当会で運行管理する移動図書館車を運転しながら視察した。

A 「ンドウェドウェ」地域

永年に亘る当会の図書普及活動によって日本からの大量の図書送付、又、図書室の設置（コンテナ図書館も含む）もある程度進んで状況は改善されつつある。しかし図書室の棚には未だ十分な図書が収納されているとは言い難く、今後も図書の送付を根気よく続けて行く必要があるだろう。日本から送付する図書のみならず現地での購入（その為の予算）、更に他の諸国からの援助要請等、州政府、学校単位での自助努力が望まれる。

B 「ウグ郡」

ダーバンから南下する事1時間。インド洋に面する小さな町「ヒバディーン」に拠点を移した。ここから西に広がる「ウグ郡」の20校に図書普及活動を展開して行く。既に教育センターに寄贈した車が活動をしている「プンガシェ」地域を皮切りに「ヒバディーン」「ドウドウドウ」地域を視察して回った。図書室を所有している学校は僅かに一校。この地区は移動図書館車プロジェクトの効果を引き出せるうってつけの場所だ。

移動図書館車送付計画の最後の車、習志野大久保図書館より受領の「きぼう」号。多くの車が現地で塗り替えられ以前の面影を失ってしまう中でこの車は戴いたペイントそのままに名前も「イテンバ=きぼう」号と名付けあたかも習志野市内の延長を走行しているかの顔で丘陵のデコボコ道を呻吟しながら登り降りしている。

平野らしい平野がないウグ郡は丘陵地帯からいきなりインド洋に落ち込む。従って平らな道は海岸線に沿って数本、西に向かうとドンドン高度が上がる。数百Mの丘陵が果てしなく続く。谷筋には川と言うよりクリーク程度の小川。丘陵の中腹に点々と民家。集落を造らず散居形式は牧畜の名残か？ どう見ても電機、ガス、水道はなさそうだ。生活必須の水は谷から頭の上に載せて運ぶか天水が（屋根の脇には必ず雨水タンクがある）頼り。サトウキビ畑が行けども行けども広がる。それ以外の大規模農業はなさそうだ。

幹線道路は舗装してあるので問題ないがそこから外れると赤茶けた土埃のデコボコ道。村に降りる長大な坂道を巨大なお尻を振りながらフーフー登って行く女性たちは一体どこまで行くのだろうか？ 下校時の生徒達は言うに及ばず、おばちゃん、暇そうなお兄ちゃん達に到るまで全ての南ア人は陽気だ。同行の大学生・森君（TAAA会員、THAN球プロジェクト）の手振りに顔中口にして答えてくれる。ノリのいい森君は牛にまで手を振っている。



「きぼう」号は小さい。1500冊積載の2トン車ベースの車だが5000cc近いエンジン、強力なエキゾーストブレーキ、アンチスキッドブレーキ等大型車並みの装備を誇る。日本国内で主流の3000冊積載のマイクロバスタイプでは多分このUP・DOWNはきつ過ぎるだろう。

数ヶ月前に立て続けに3本のタイヤがリバーstした。(パンクでは写真左：本を見ながら先生とお勉強

ない。) 私はその報告を聞いたとき「まさか」と思ったがこの路面状況では充分考え得る。喋りながらの運転は舌を噛み切る覚悟がある。車が健全なうちに耐久性を上げる対策を考える必要がある。サスペンションのリーフ増し、ショックアブソーバーの強化等考えられる対策を全て施工するとともにスペア車の取得を早期の内に計画した方がいいだろう。折角造り上げたシステムが車の故障と共に無くなる事だけは避けたい。

学校に着くとデコボコの校庭の平らな場所を選んで停止、入念にサイドブレーキを引きパーキングにセット。車内から、うしろの貸出機に移動できる。車の外側からサイドの本棚をオープン。悪路で倒れた本を立て直し、後ろに回り後扉を開けるとステップが引き出せる。車内に入ると棚から飛び散った本が床に散乱しているが素早く元に戻していると休み時間のサイレン。群がって来る子供達にスタッフのマイケルが丁寧に借り方を説明。以前は一度先生に貸し、先生の責任の元、子供達に又貸ししていたが今日ではコンピューターに登録するので各生徒に直接貸せるようになった。

この地区には圧倒的に足りない本を 1500 冊も抱えて赤い土埃をたてながらゴトゴト走って来るイテンバ号は子供たちの目にはどのように映っているのだろうか？ 恐らく彼らにとってこんなに多くの図書に接するのは初めての経験だろう。読書を通じて知識欲を刺激されて明日への「きぼう」に続く道が習志野の地からこの「ウグ」へ一本に繋がって見えた。



写真上：マイケルの働きぶり。イテンバ号に本を積んで学校を訪問。本の利用の仕方、読書の基本的な注意（きれいな手で・・・ページを折らない。本の選び方・・・）などを説明する。車内のパソコンに登録して貸し出す。

南ア訪問記 4 (2011年7月31日～8月9日)

南アの子供たちとサッカーの交流

森 直之

写真：中央が筆者

THAN球プロジェクト発足

THAN 球プロジェクト（サンキュープロジェクト）の始まりは、多摩大学の授業「横浜FCのホーム戦でイベント企画」の中で生まれました。この授業は、生徒が1から考えてプレゼンテーションやプレスリリースを行ないイベントをつくりあげる授業です。イベントを何にしようかと考えていた私は、1つの放送を見たのがきっかけでTHAN 球プロジェクトが生まれました。その映像は、南アフリカワールドカップの開催1年前に流れていたTVの映像でした。映像の中では、スーパーの袋を何重にも丸めて作ったサッカーボール、凸凹のグラウンドを素足・裸でサッカーを行なっている少年の姿、日本では絶対見ない光景がそこにはありました。そんな子供たちに少しでも手助けをしたい、またサッカーを通じて礼儀や人間関係を作ってもらいたいとの思いでサッカーボールを送ることにしました。実際、私も幼稚園から現在までサッカーを行なっていて礼儀や友人関係など学校ではなかなか教えてもらえない事をサッカーを通していろいろ経験する事ができました。



TAAAとの出会い

THAN球プロジェクトの最初は、裸足の少年にサッカーシューズを渡したいとの思いで色々な機関にあたりましたが受け入れられる機関がなく断念しました。次に、スーパーの袋で作っているサッカーボールを本物のサッカーボールにしようとの思いで、ネットで探しているとTAAAのHPを発見して連絡を取りました。TAAAは、以前からサッカーボールや縄跳びなど南アフリカに送っていましたのでノウハウをもっていましたので凄く助かりました。また、今年



はTAAAとTHAN球プロジェクトの共同プロジェクトを立ち上げて「バファナ・バニヤニヤ サッカープロジェクト」としてこれからもより一層頑張っていきたいと思っています。(南ア男子サッカー代表の名称「バファナ・バファナ」南ア女子サッカー代表の名称「バニヤニヤ・バニヤニヤ」)

写真左：シュクミサ小にて、一つのボールで始まるサッカー試合

THAN球プロジェクトの活動

今年で3年目を迎えるTHAN球プロジェクトの過去の活動を紹介します。主に2つの活動を行なっています。1つ目の活動は、サッカー

ボールの収集です。1年目は63個 2年目は752個を計815個回収しました。サッカーボールの回収方法には、主に3つの方法があります。1つ目は、小学校から中学校に上がった際のボールサイズ(4号球→5号球)の変更です。中学生や小学生のチームからたくさんのサッカーボールを頂きました。2つ目は、フットサルコートやサッカーコート会場の落し物のボールです。平均して1か月に2個の落し物ボールがあり、年間に例えると24個にもなり他の会場を合わせると莫大な数になります。また、そのサッカーボールが全て捨てられていて、有効活用ができなかったのが現状でした。3つ目は、プロチーム(J1・J2・JFL・Fリーグ)のサッカーボールです。プロチームのサッカーボールは、毎年スポンサーが変わり年に1回ずつサッカーボールが変わり捨てられていたのが現状です。また、横浜FCしかサッカーボールを頂いていませんが、今後プロサッカーチームの参加数が増えればと思っています。2つ目の活動は、開発途上国及び様々なサッカーを紹介するのが私たちの使命だと思っています。開発途上国の現状を皆さんと共有して、日本と開発途上国がどちらも「THANK YOU」って言えるようなイベントやプログラムを作っていきたいと思っています。また、世界で1番行なわれているスポーツのサッカーは色々な面を持っています。例えば、ホームレスサッカーのワールドカップや軽度発達障害児のサッカーがあります。ホームレスサッカーのワールドカップのサッカーは、年に1回あるワールドカップを目指して努力することで何かを得てほしいということでワールドカップが始まりました。実際に、参加した選手のうち7割の人生をドラスティックに変えた、93%が新たな生きがいを見つけ、83%が社会とのつながりに改善がみられたという結果がでています。軽度発達障害児のサッカーでは、サッカーを通じてコミュニケーションを取り様々な障害を克服するために子供達は頑張っています。実際に、半年の間子供たちと関わっていますが、積極性が出てきたり人の話を聞く等の集中力がついてきたのかなと思っています。これも、サッカーというツールが生み出したものだと思います。

南アフリカのサッカー

南アフリカの滞在では、10校の小学校・中学校・高校を巡りました。1番印象に残っているのは、都市と田舎の地域格差です。都市の学校には行っていませんが、車の中で見る風景では、子供達がサッカーシューズを履いていてサッカーボールが10個ぐらいあってグラウンドのサイズが大きくて平面でした。しかし、都市から車で1時間走ると山だらけで、サッカーゴールは木と木の間で、平面のグラウンドがなく凸凹のグラウンドに裸足で、サッカーボールはスーパーの袋を丸めて作ったサッカーボールを使用してサッカーを行なっていました。この光景をみて、スーパーの袋で作ったサッカーボールを本物のサッカーボールにする、凸凹のグラウンドを平面のグラウンドにする、裸足の少年に靴を渡す、指導者の育成を行ない失業者を減らす、チームをたくさん作りトーナメントを作る等、少しでも改善できればなと思っています。また、最終的には外部の手助けなしで国内だけで良い循環が生まれれば良いと思っています。最後に、10校の

学校を巡って共通して思ったことは、みんなが「サッカーが大好き」と言うことです。サッカーボール1つ渡せば、一気に40人集まってサッカーボールを追いかけます。その横では、笛を吹いて試合をコントロールする審判がいます。ドリブルで相手を交わした時やシュートが決まるたびに踊りだす少女の姿。それらの光景を笑顔で見ている先生の姿。全て、最高の姿でした。南アフリカに行きサッカーの素晴らしい姿をまた1つ知った旅でした。サッカーと一緒にプレーしてくれた子供達ありがとう。

写真左：インプメレロ小にて、初めてのサッカーで頑張る女子。水たまりも平気。



「被災者／被災地の記憶」に出会い、巻きこまれていく

茂住 衛

2011年3月11日の東北地方／東日本大震災。大津波、原発事故と放射能汚染。この出来事は、これからも [3.11] という省略形で語り継がれていくに違いない。[3.11] を体験した人は誰もが、被災地（この範囲の捉え方自体も問い返されるが）以外の人びとであっても、この巨大な出来事に巻きこまれていった。その記憶は、これからも私たちのなかに残っていくだろう。だが、被災地の「外」側の世界では多くの場合、その記憶は「その日、私は……」という過ぎ去った一時点の思い出として思い起こされるだけのものになってしまうかもしれない。その一方で、あえて「被災者／被災地の記憶」を想定してみる。それは、[3.11] という裂け目があったからこそ、それ以前の記憶も改めて想起させながらつながっていくものではないか。

アジア・アフリカと共に歩む会 (TAAA) が5月と7月に、津波により甚大な被害を被った宮城県石巻市を訪問した⁽¹⁾ ときに、私も同行した。この機会も含めて、私が今日までに [3.11] の被災地を訪れたのは4回だけ、しかも1泊から3泊程度の滞在でとどまっている。いわば被災地の「外」側からときおり思い出したように被災者／被災地の「支援」（この言葉のあいまいさや、それを使うときの違和感はさておき）に関わっているだけでしかない。それでも、なぜ直接に被災地に行きたいのか、[3.11] を単なる過去の思い出で終わらせたくないのはなぜなのかということは、自らに問い返している。そして、被災地／被災者の支援活動に関わるということは、「被災者／被災地の記憶」に出会い、あるいは巻きこまれていくことでもあると意識している。「被災者／被災地の記憶」は、たとえば [3.11] という裂け目をつくろうものとして想起される。

わたしたちは、ほんのちいさな頃から津波の話聞いてきたはずだった。両親からも聞いていたし、村の年寄りからも聞いていた。時には、町の一番大きな体育館へ集められて、東北大学から来た津波の博士が3Dを駆使した津波の映像だって見ていた。津波になったらどこへ逃げればいいのかも、町のみんが知っていた。津波に関するこの町にひとたちの知識は、相当なものだったと思う。だれもが津波を熟知していた。熟知していた、はずだった。津波とはこのことだったのか……。⁽²⁾

とてつもない津波に襲われ、津波に対するそれまでの記憶はあっさりとりセットされてしまう。それでも、生き残った人びとは、助けることのできなかつた人たちや未来の人たちへの義務として、「被災者／被災地の記憶」を改めて語り継いでいく。

この言葉を記した山内明美は、石巻市の北側に隣接する宮城県南三陸町の出身。高校を卒業してから町役

場で働き、その後、東京の大学に進学し、現在は一橋大学大学院に在学中。3月11日のそのときを大学の寮で迎えた彼女は、2週間後にようやく南三陸町にたどり着く。三陸の地を「最後の場所（＝ケガツ。本来ケガツは「飢饉」を意味している）」と言い、自らに刻み込まれたもうひとつの「記憶」について述べる。

三陸で育ったわたし自身も、この国の高度経済成長を通り抜けながら、<ほんたうの飢饉（ケガツ）>の記憶を持っている。／1993年、平成の大凶作のことだ。私は高校生だった。（中略）／あの時、「昭和のはじめの大凶作も酷かったが、こんなに酷い凶作ははじめてだ」と村の年寄りも口々に言った。「時代が違い、餓死で村が全滅、おまえは娘身売りだ」と笑った。⁽³⁾

個人的な話になるが、私自身は幼いころに、「富山の薬売り」として昭和の戦前に山形方面をまわっていた母方の祖父から、東北の大飢饉と娘身売りの話を聞いたことをかすかに覚えている。だが、このおぼろげな記憶と、「おまえは娘身売りだ」と言われ自らに刻まれた「記憶」の間には、とてつもない落差がある。そして、その落差があるからこそ、私は自らが「被災者／被災地の記憶」に自覚的でありたいと思う。

日本の東北（の太平洋側）一帯で巨大な甚大な被害をもたらした [3.11] が想起させた「被災者／被災地の記憶」は、東北だけにとどまるものではない。それは、日本だけでなくグローバルな世界の各所で多様に受け継がれている、ある「記憶」ともつながっている。「東北学」の提唱者として、東北の各地を歩きまわり聞き取りを続けてきた赤坂憲雄の言葉を紹介しよう。

最初に僕のなかに浮かんだのは「なんだ、東北って植民地だったのか。まだ植民地だったんだ」ということです。かつて東北は、東京にコメと兵隊と女郎をさしだしてきました。そしていまは、東京に食料と部品と電力を貢物としてさしだし。迷惑施設を補助金とひきかえに引き受けている。そういう土地だったのだと。⁽⁴⁾

[3.11] が想起させた「被災者／被災地の記憶」は、その断面において「非植民者／非植民地の記憶」でもあるのだ。

【注】

(1) TAAAの2回の石巻訪問の活動記録は、TAAAのウェブサイトの「活動日誌」に掲載してある。

<http://www.taaha.jp/diary.html>

(2) 赤坂憲雄、小熊英二、山内明美『「東北」再生』イースト・プレス、2011年、pp.114-115

(3) 同 pp.117-118

(4) 同 p.15

◆ 主な活動 (2011年5月16日～2011年9月15日) 下線は南アにおける活動

5/16 ひろしま・祈りの石事務局訪問 平林薫 久我祐子
野田千香子

5/17 JICAにて会議 平林 久我 野田

5/17 打ち合わせ会議 平林 久我 津山直子

5/18 サッカーボール洗い 森直之 堀田浩平 野田

5/19 インターナショナルスクールに本寄贈依頼
上林潤子 野田

5/20～23 住所録更新・ラベル印刷など 西村裕子

5/22 被災地へ本等を送付 高野千恵美 浅見克則

5/23 南アフリカに戻る 平林

5/25 サッカーボール梱包 森 堀田 野田

5/26 被災地へ寄贈品梱包作業 高野

5/27 ヒバディーン地域学校訪問 平林

5/27～29 仙台、石巻、女川へ震災支援 浅見 久我
津山 関根 茂住

5/29 梱包作業と会議 北爪健一 下谷房道 鯨井
幸一 野田 斎藤由紀 森 野田涼平 堀田浩平 浦和
学院高校より杉沢綾香 田中慈季 久野未希 布施百恵
森下聖大 深瀬秀太

5/31 南ア事務所ダーバンからヒバディーンへ移転

6/2 会報編集・校正・印刷へ 野田 西村

6/3 JICA プロジェクトのスタッフミーティング 平林

6/6・7 教師研修会準備と開催(ドウドウドウ) 平林

6/8・9 ヒバディーン学校訪問・教師研修 平林

6/10 ダーバンにてプロジェクト物品購入 平林

6/11 会報郵送準備作業 高野 野田

6/12 作業と会議 上林 浅見 下谷 野田 久我 茂住
高野 東北被災地訪問報告 久我

6/12・19 石巻への支援物資梱包と発送など 高野

6/13 子供の本を石巻へ発送 北爪

6/14 教師研修課開催(プンガシエ) 平林

6/15 ヒバディーン地域学校訪問 平林

6/15 ～20 埼玉県助成金申請準備 野田

6/19 AJF 総会シンポジウム 久我(災害支援報告)
津山 茂住 野田 牧野久美子

6/20 埼玉県助成金面談 野田

6/20 クリスチャンアカデミーから本引取り 下谷 浅見

6/20 ひろしま助成金報告書作成 久我

6/20 イジンゴロウエニ教育センターで本の配布 平林

6/21 ドウドウドウ地域学校訪問 平林

6/22 ンドウエドウエ地域学校訪問 平林

6/23 ドウドウドウ、地域学校訪問 平林

6/28 ヒバディーン・コミュニティ農業グループと
ミーティング 平林

6/29 サッカーボール梱包 森 丸田夢士 堀田 野田

6/30 「反貧困ネットワークシンポジウム 野田

6/30 プンガシエ・コミュニティ農業グループと

ミーティング 平林

7/1 JICA プロジェクトスタッフ会議 平林

7/1・7 石巻へ支援物資発送 高野

7/3 会計会議 久我 浅見 丸岡晶 野田

7/6 ダーバンで物品購入 平林

7/8 プンガシエ教育センターにて式典出席 平林

7/10 作業と講座 鯨井(講師) 北爪 野田 榊裕美 森

7/9～10 震災支援訪問へ 高野 浅見 上林 茂住

7/10～15 HP 更新 久我

7/11 JICA 書類をDHLで発送 平林

7/13 ヒバディーン地域学校訪問

7/18～21 図書館巡回訪問準備 平林

7/15 東京インターナショナルから本引取り 浅見

7/25 イジンゴロウエニ教育センターにて本配布 平林

7/26 ELET 訪問・バスのライセンス更新 平林

7/27・28 ヒバディーン地域学校訪問 平林

7/29 JICA プロジェクトスタッフ会議 平林

7/29 南アへ送金 野田

7/30～8/9 南ア訪問 久我 浅見 津山 森

8/1 石巻へ三鷹市羽沢小制作のウチワ送付 高野

8/1 埼玉県国際交流協会へ TAAA 資料届ける 野田

8/4・18 石巻へ支援物資発送 高野

8/7 作業と会議 北爪 鯨井 丸岡 野田 高野 竹澤修
浦和学院高校より大塚美裳 越川亜耶

8/11・12 ヒバディーン・ドウドウドウ学校訪問 平林

8/12・17 JICA 経理書類作成 久我

8/16 JICA スタッフ会議 平林

8/17・24・26 3地域の学校訪問 平林

8/18・23・25 3地域の教師研修会開催 平林

8/20～26 ボランティア貯金報告書作成 久我

8/26 青葉インターナショナルから本引取り 浅見

8/28 会報封筒準備 高野

8/29～9/3 TAAA 活動報告会配布資料作成 鯨井

8/30～9/9 連日、3地域の学校訪問 平林

9/11 作業と会議 鯨井 野田 上林 浅見 高野 久我
茂住 午後 南ア訪問の報告 久我 浅見

9/12～ 次回 TAAA 活動報告会リリース 丸岡

9/12～15 JICA モニタリングチームと3地域の学校・コミ
ュニティグループ訪問 平林

ルイボスティのご紹介

ルイボスティ茶は南アの西ケープ州だけでとれる健康茶です。1パックでヤカン一杯、作れます。

1箱 80パック 2000円(送料一律500円)

(5箱以上 送料無料)

お申込みは、P12 のTAAA連絡先へ